

## 令和元年度「維孝館学園」クリエイト会議 第3回教育制度部会まとめ

1. 日時 令和元年12月2日(月) 17時30分～19時00分
2. 場所 宇治田原町総合文化センター 第2研修室
3. 出席者 初田教育制度部会長、教育制度部会委員7名、  
通学部会長、地域・広報部会長、事務局3名 計13名  
(他に傍聴者1名)
4. 内容等

### ①部会長挨拶

今回の部会では、2回の視察を終えたので他地域の取組を見たとえでの本町のこれまでの取組の振り返りをしていきたい。義務教育学校の方向性を確認しつつ、さらにこの会議で何を協議していく必要があるのかをみんなで考えていきたい。

### ②協議(2回の視察を終えての感想、今後協議が必要だと考えること)

委員：川東学園は教育効果がありそうに感じた。施設は開放的でコンパクトにまとまっていた。子どもが生き生きとしていて、保護者にとって安心感がありそう。川東学園は人的な支援を含め 京都府がバックアップしている。ほそごう学園はあまり教育効果が伝わってこなかった。

本町では、教育委員会の中で誰が中心に進めているのかが分からない。小中一貫教育に長く携わっていく人材が必要。PTA会長も個人として今後継続的に関わってほしい。開校準備室を開設してはどうか。

委員：川東学園は1小学校1中学校だったのでスムーズに開校できた。本町とは状況が異なる。

教育課程はシンプルだが、できることからやっていくことで成果はあがっていた。小中学校両方の多くの教員が評価することができ、小学校の教員にとっては9年間の出口(成長や進路)が見られることが目を引いた。

部会長：効果のある手立てや教育目標達成に向け、9年間かけて取り組めるのが義務教育学校という制度だと思う。

委員：小学校教員は過程を見て、中学校教員は結果だけを見る傾向があると思う。

委員：維孝館中学校は家庭訪問、三者面談を山城地域の中でも多く行い、また、内容も丁寧に話を聞くなど、保護者とのパイプ作りを大切にしている。教員同士も小中間で参観し合い、小小連携にも力を入れて取り組んでいる。

部会長：小中学校のいわゆる文化の違いをどう乗り越えていくかも今後の課題となってくる点だと思う。

委員：本町では、小小連携の中で両小学校の同学年の教員の打ち合わせを多く行っている。ほそごう学園は地域やPTAの協力など準備段階について大変参考になった。川東学園は施設面や子ども達、先生たちの様子が参考になった。2校を視察して、子どもたちの資質能力の向上や効果的な教職員組織の運営ができるのは義務教育学校だと思った。

委員：学力向上も大切だが、川東学園で中学生が小さい子に関わる場面のやさしさを見ることができ、そういった子どもたち同士のたての繋がりを強化するのは小中一貫校ならではだと思った。本町でもそうした点を活かして子どもたちが心豊かに成長していくことを望みます。

委員：義務教育学校について、堅いイメージを持っていたが、実際に現場で子どもたちの様子を見てそのイメージが払しょくされた。

チャイムの鳴らし方、学年ステージの分け方等、準備が大切だと思うので宇治田原町に合うシステムを考えていかなければならないと思った。

部会長：チャイムはノーチャイムや決められたときだけ鳴らす方法がある。また、学年の区切りは途中で変えることもできる。

委員：小学校部分と中学校部分の教員の相互乗り入れはどうしているのか関心があったが、あまりできていないことが分かった。どちらの学校も中学校から小学校への乗り入れはあるが、部活動は中学校教員が中心で、小学校から中学校への乗り入れはあまりなかった。小中学校両方の免許保持者を集める必要があると思った。また、教員配置の面でも川東学園は加配の配置が手厚いと思った。

部会長：全国の他地域では小学校教員の中学校での指導もある。小学校の担任をしながら、中学生への教科指導や部活動の顧問をしている例もある。

委員：我々がどんな学校にしていくのか思い描き、町にしっかりと伝えられればいい。

部会長：各部会の意見を取り入れ、開校までの道筋を示した工程表が必要であるし、今後は、地域やPTA等の意見を聞く組織が必要だと考える。また、義務教育学校の方向性は決まったが、その先について、クリエイト会議で何をどこまで協議

するのか明確にしてもらいたい。

事務局：準備室等の組織については必要性を感じてはいるが、今後教育委員会事務局で検討していくが、町長部局とも調整が必要である。教育制度部会では、発足時は学年の区切りについても検討課題だと考えていた。各部会の到達点についても今後示させていただきたい。

委員：準備室は必ず作ってほしい。その組織で3部会の意見の咀嚼をする等して機能させていかないと時間が過ぎるばかりである。委員会で誰がどのように決めているのか見えてこない。

部会長：令和6年度の開校から逆算すると令和2年度には、教育方法や施設の設計についてより具体的に話を進めていかなければ、開校に間に合わない。

開校準備に当たる組織には色々な形がある。PTAやPTAのOB、地域の学校を支援してくれる組織とクリエイト会議の3部会がどうかみ合い、教育委員会事務局がどうか関わっていくのが重要である。

学年の区切りについては、今後の課題だが、今の時点で何か意見はありますか。

委員：4-3-2の区切りは、教員の数や配置をシュミレーションすると後半の3-2を教科担任制にできると思う。

部会長：他校でも最初を4年で区切るのが多い。心身の発達の段階によって。思春期前の4、思春期にさしかかる5年生からの5年を3と2に分けている。何によって分けるのかいろいろな観点があるが、4-3-2が適切かと思う。本日は時間が来たので次回以降にこの点についても協議していきたい。

### 【その他（事務局より）】

- 1 教員免許制度の概要について（資料を配布し、第2回部会での説明の補足）
- 2 今後の予定について
  - ・12月 教育委員会で各部会での決定事項等を報告⇒協議
  - ・1月 総合教育会議で各部会での決定事項等を報告⇒協議
  - ・2月 今年度のクリエイト会議の各部会での協議について広報発行  
小中一貫教育に係る講演会の開催
  - ・2月下旬～3月上旬 クリエイト会議（各部会、全体会）  
【今年度のまとめと来年度に向けて】
  - ・2月 教育委員会【今年度のまとめと来年度に向けて】
  - ・3月 総合教育会議【今年度のまとめと来年度に向けて】